

[制作記録]

布目象嵌を用いた表現の可能性を探る研究

Research to Explore the Possibility of Cloth Inray Expression

水代 達史
MIZUSHIRO Satoshi

1. はじめに

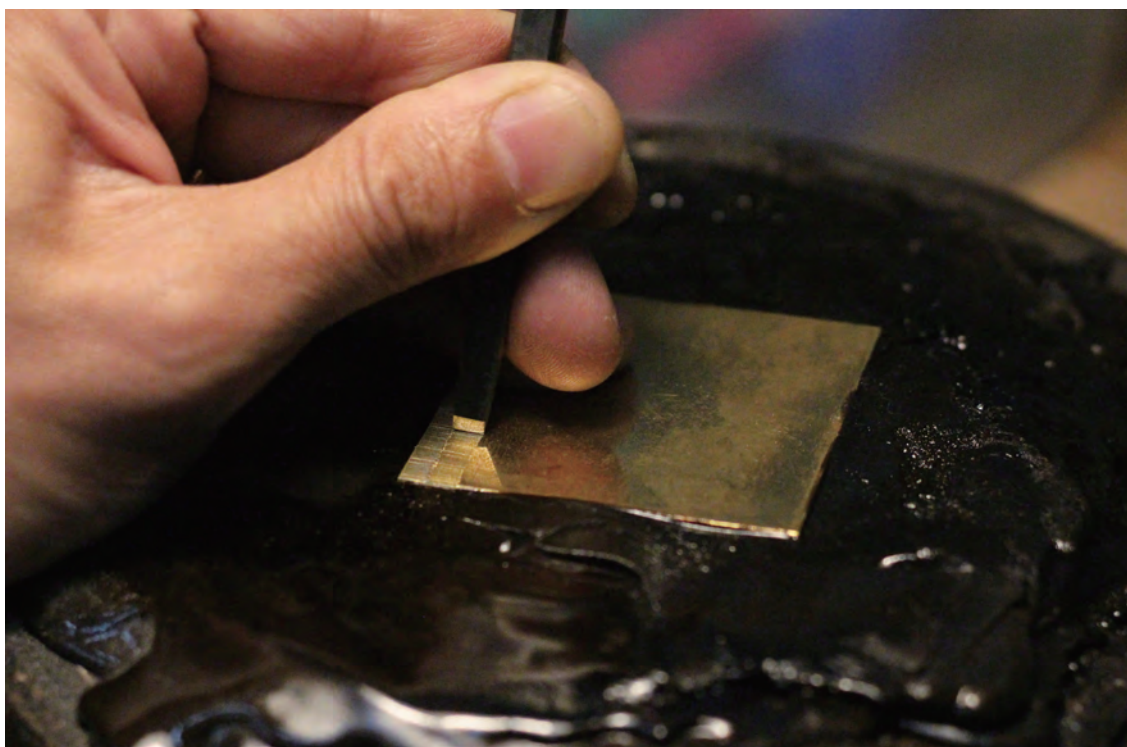
これまで金工技法の中で加飾を専門とする彫金技法を基盤に立体造形作品の研究・制作を行ってきた。主に打ち出し¹や透かし彫り²といった技法を複合して使用しており、制作工程においても造形と装飾を工程として切り離さず、同一に組み上げていくものを主としてきた。今回の研究では金工における新たな加飾表現を発見・構築することを前提とし、今後の制作につなげていくことを目的とする。加飾技法である象嵌技法の中から布目象嵌に着目し研究を行うこととした。

2. 布目象嵌について

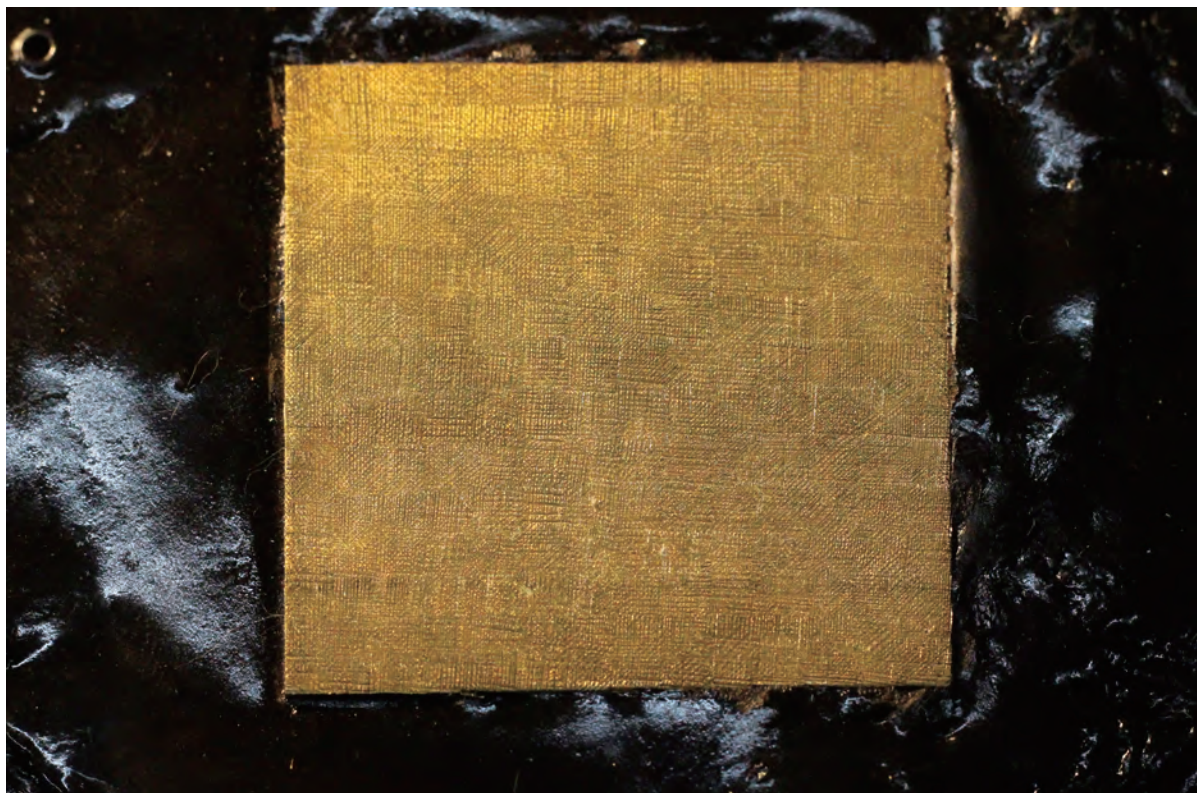
布目象嵌とは金属素地に専用の鑿（目切り鑿）を用いて、やすり目のように多方向から細い切れ目を入れ、その出来た谷部に金・銀等の薄板を打ち込んで嵌める象嵌技法である。産地としては京都（京象嵌）や熊本（肥後象嵌）に代表される技法であり、長く繁栄してきたものである。布目象嵌技法の歴史は古く、鉄砲伝来に始まると言われており、ポルトガル人によって持ち込まれた鉄砲に施されたというのが有力な説である。その後、鉄砲だけではなく鉄を素地とする武器や武具へ広く応用され、特に刀槍金具の装飾として発展した。廃刀令後は美術装飾品や装飾小物として繁栄を見せ、明治期の日本文化として海外、主にヨーロッパを中心に高い評価を得て広く輸出された。



目切り鑿（左：正面、右：横面）



目切り鑿と金槌を用いて、隙間なく連続して打刻していく。



縦・横・斜め4方向からの目切りを終えた真鍮版。

3. 表現への展開について

布目象嵌では通常は鉄などの硬い素地に純金や純銀など柔らかい貴金属を嵌め込むことが主であるが、素材に限定されず幅を持たせる事で新しい表現ができるのではないかと考えたのが研究を始める起点である。兼ねてから伝統技法と現代的な手法を複合し

て表現することをテーマとしており、今回も同一線上に捉え研究を行った。金属素地には柔らかに造形しやすい銅や真鍮を用い、嵌め込む金属（紋金）には金箔やアルミニウムを用いた。特にアルミニウムは入手が容易なアルミテープを使い、アルマイト着色³を施すことで色幅を持たせ、より多彩な表現への展開を図った。



紋金に使用した厚さ0.05mmのアルミテープ。



アルマイト着色を施したアルミテープ。粘着面を溶剤で剥がし紋金とする。



テストピース。





虹彩／銅・真鍮・金箔・アルミニウム（2019）

註

- 1 打ち出し：金属板の裏面から模様や浮き彫りを打ち出す金工技法。レリーフや装身具、鋳金具などに用いる。
- 2 透し彫り：金属板を切り透かして紋様を見せる技法。
- 3 着色アルマイト：アルミニウムを陽極酸化（アルマイト）処理すると酸化皮膜に微細孔が形成される。形成された微細孔に染料を浸透させる着色技法。主に工業的に用いられるもので処理面は硬質化し、耐食性に優れる。

（みずしろ・さとし 工芸／彫金）

（2020年11月5日 受理）

